平城宮中央区朝堂院の調査（平城第389次）

中央区朝堂院朝庭部分における３回目の調査です。過去２回の調査では、この場所で掘立柱の建物跡群を発見し、天平神護元年（765）11月称徳天皇の大嘗祭（だいじょうさい）にともなう大嘗宮（だいじょうきゅう）の遺構と推定しました。今回の発掘調査は、大嘗宮の付属施設である廻立殿（かいりゅうでん）の全貌を明らかにすることを主な目的として、2005年３月29日より開始しました。調査面積は約1700㎡です。

中央区朝堂院は、第一次大極殿の南に位置する、平城宮の中心的な施設のひとつです。塀で囲まれた長方形の朝堂院の区画には、朝堂と呼ばれる南北に長い建物が東西対称に建ち並んでいます。

建物に囲まれた空間は官人達が列立する広場で、ここを朝庭と呼びます。ここでは、毎年の元日の朝賀や、外国使節に対する饗宴がおこなわれ、奈良時代を通じて使用されたと考えられています。

ところで大嘗祭とは、天皇が即位の後、初めて新穀を神に供え、神とともにこれを食する儀式です。その時に用いる仮設の建物群が大嘗宮で、過去２回の調査（平城第367次・376次）では、称徳天皇の大嘗宮悠紀院（ゆきいん）の全貌が明らかになりました。また、これは、平安時代の書物（『儀式』、872～877年頃成立）の記載から復原される大嘗宮の規模・構造にほぼ一致するという、驚くべきものでした。

しかし、成果とともに課題も残されました。それは、大嘗宮の北側に位置する廻立殿についてです。廻立殿は、大嘗祭の儀式の間、天皇が湯を浴びて身体を禊（みそ）ぎ清め、御在所となる建物です。過去の調査では、大嘗宮の北側、廻立殿相当の位置で、桁行５間・梁行４間の規模に復原される大型建物が検出されました。しかし、『儀式』に記されている廻立殿は、桁行５間・梁行２間と、規模がそれよりも小さいのです。大嘗宮の建物群に関しては規模がほぼ一致したにもかかわらず、廻立殿のみ規模が大きく異なるのはなぜなのでしょうか。果たして、この建物を廻立殿と考えて良いのでしょうか。

他にも課題はあります。過去の調査では、同じく中央区朝堂院の朝庭に、大嘗宮の建物よりも新しい、整然とした配置を持つ掘立柱建物群の存在が明らかになっています。それらは中央区朝堂院の中軸上に展開し、重要な役割を果たしていたことが推測されますが、性格や全貌はまだ十分に解明されていません。また、廻立殿相当とした建物を、この建物群と関連づけて再考する必要も出てきています。

今回は、これらの課題を解明するため、廻立殿相当の建物を含む範囲と、それに続く北側に調査区を設けました。そして、廻立殿相当の建物がさらに北に延びるか否かとともに、周辺に関連する建物や区画施設などが存在したかを明らかにしていきたいと思います。

５月20日現在の状況としては、調査区の広い範囲に礫が敷きつめられた状態を確認しています。この礫敷きは、過去の調査によって、朝堂院朝庭部の舗装に由来するものと考えられています。そのため、廻立殿相当建物の柱穴や他の遺構との関係がどのようであるかを確認しながら、慎重に調査を進めています。

調査地付近のクローバー畑で、次々とかえり始めるヒバリの雛たちが大空高く舞う頃には、廻立殿の「謎」が解け始めていることでしょう。

（平城宮跡発掘調査部　中川 あや）

調査区全景（北から朱雀門を望む）

礫敷きの様子（東南から）